

常三島遺跡機械工学科地点・総合科学部 3 号館地点 出土貝類遺体の分析

山根敦・中原計*

* 鳥取大学地域学部

1. 試料の概要

常三島遺跡は、徳島大学常三島キャンパス内に所在し、中・下級武家屋敷地である徳島城下町常三島地区にあたる。今回分析を行った試料は、機械工学科地点、総合科学部 3 号館地点から出土した貝類遺体である^{註)}。

(1) 機械工学科地点

機械工学科地点では、大きく前期 (17 世紀)・中期 (18 世紀前～中葉)・後期 (18 世紀後葉～19 世紀) の 3 つの遺構面が検出された。調査地点ではそれぞれの時期の屋敷境溝と各屋敷地内の土坑などの遺構が検出されている。貝類遺体は、主に後期の遺構からコンテナ 4 箱分ほどが出土している。

(2) 総合科学部 3 号館地点

総合科学部 3 号館地点では、19 世紀代 (第 1 遺構面)、18 世紀代 (第 2 遺構面)、17 世紀代 (第 3 遺構面) の 3 つの遺構面が検出された。調査地点からは、それぞれの時期の屋敷境溝と各屋敷地内の土坑などの遺構が検出されている。貝類遺体は、第 2 遺構面の遺構から主に出土している。

なお、各遺構がどの屋敷地に属するかについては、「御山下島分絵図 常三島」などの絵図と宮本武史編 1972・1973『徳島藩士譜 上・中・下巻』に基づいている。

2. 分析結果

常三島遺跡機械工学科地点および総合科学部 3 号館地点から出土した貝類遺体は、腹足綱 2 種、二枚貝綱 8 種の合計 10 種類である (表 1)。なお、シジミ属はヤマトシジミがほとんどであると思われるが、マシジミとの見分けが困難なため、シジミ属までにとどめている。

(1) 機械工学科地点

本地点では、12 の遺構から 9 種 3297 個体を確認した (表 2)。貝類が出土した遺構は、坂越家の範囲から 1 つ、佐藤家の範囲から 3 つ、原家の範囲から 6 つ、屋敷境の溝が 2 つである。最も多いのがシジミ属で 2303 個体、次にハマグリが多く 968 個体であり、この 2 種で全体の 99.2

表 1 貝類遺体の種名

軟体動物門 MOLLUSCA	
腹足綱 GASTROPODA	
古腹足目 Vetigastropoda	
サザエ科 Turbinidae	
サザエ <i>Turbo (Batillus) cornutus</i>	サザエ
盤足目 Discopoda	
ウミナナ科 Batillariidae	
ウミナナ <i>Batillaria mulutiformis</i>	ウミナナ
二枚貝綱 BIVALVIA	
フネガイ目 Arcoida	
フネガイ科 Arcidae	
ハイガイ <i>Tegillarca granosa</i>	ハイガイ
マルスダレガイ目 Veneroida	
シジミ科 Corbiculidae	
シジミ属 Corbicula	シジミ属
マルスダレガイ科 Veneridae	
アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>	アサリ
ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	ハマグリ
カガミガイ <i>Phacosoma japonicum</i>	カガミガイ
オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i>	オキシジミ
シオフキ <i>Mectra veneriformis</i>	シオフキ
ニッコウガイ科 Mactridae	
サラガイ <i>Megangulus venulosus</i>	サラガイ

表2 機械工学科地点出土貝類

居住者	出土遺構	時期	サザエ	ウミニナ	シジミ属	アサリ	ハマグリ	カガミガイ	オキシジミ	シオフキ	サラガイ
坂越家（来右衛門、甚之丞）中・小姓格(10石程度)	SK165	18c前～中葉			1		1	2			
佐藤家（文次郎）各奉行職(8石)	SK11	18c後葉～19c					19				
	SK205	18c後葉～19c					338			2	1
	SK306	18c後葉～19c	2		1665		24				
原家（居住者不詳）	E-8	17c			4		79				
原家（六左衛門、吉之丞 一信）江戸在番など(100石)	SK428	18c前～中葉					1				
	SK545	18c前～中葉			110	1	6		2		
	SK551	18c前～中葉	3		7		235		5		
原家（弥三郎、吉之丞長明）御城山定番など(100石)	SK405	18c後葉～19c			1		2				
	SK502	18c後葉～19c	1	4			263			2	
佐藤家と蔭山家（13石）の屋敷境溝	SD11	18c後葉～19c	1								
原家と佐藤家の屋敷境溝	SD44	18c後葉～19c			515						
計			7	4	2303	1	968	2	7	4	1

%を占める。また、サザエが7点ほど確認された。その他の貝種も、食用として用いられる貝種ではあるが、個体数は少ない。

屋敷地別では、佐藤家、原家、佐藤家と原家の屋敷境溝において多数の貝類遺体がみられた。佐藤家の3遺構からは、5種2051個体が確認された。特にSK205、SK306において出土量が多く、SK205からはハマグリが338個体、SK306からはシジミ属が1665個体ほど確認された。また、シオフキ、サラガイも数点みつき、サザエも2点同定された。

原家の6遺構からは、7種726個体が確認された。特にSK502、SK545、SK551において出土量が多く、SK502からはハマグリが263個体、SK545からはシジミ属が110個体、SK551からはハマグリが235個体確認された。また、ウミニナ、シオフキ、オキシジミなども数点みつかった。サザエは4点同定された。

原家と佐藤家の屋敷境溝と考えられるSD44からはシジミ属が515個体同定された。また、機械工学科地点から出土したシジミ属は残存状況が悪いものが多かったため、殻長・殻高値を計測することができなかった。

(2) 総合科学部3号館地点

本地点では、6遺構から4種4142個体を確認した（表3）。最も多いのがシジミ属で4123個体、全体の99.6%を占める。機械工学科地点と比べ、種数が少ない。また、機械工学科地点では確認されなかったハイガイが8個体確認された。ハイガイはアカガイやサルボウなどと同じフネガイ科で、徳島では縄文時代の貝塚からも出土する貝種である。食用の貝ではあるが、今回同定できた個体数は少なかった。

屋敷地別にみると、佐和家の遺構から出土した貝類遺体が多くみつかっており、5遺構から4種4138個体が確認された。福家家の遺構からはシジミ属4個体しか、確認されなかった。

佐和家の資料を時代別にみると、17世紀の資料では、s59において出土量が多く、シジミ属が442個体、ハイガイが4個体、オキシジミが1個体みついている。18世紀の資料では、s21からはシジミ属が1950個体、ハマグリが10個体、s44からはシジミ属が1717個体、ハイガイが4個体みついている。19世紀の資料は、シジミ属1点しか同定されなかった。また、s59からはアワビ類が数点確認されたが、すべて破片であったため、表には記載しなかった。

表3 総合科学部3号館地点出土貝類

居住者	出土遺構	時期	ハイガイ	シジミ属	ハマグリ	オキシジミ
福家家（頭長） （357石）	御使番など	s39	18c	4		
佐和家（居住者不詳）		s59	17c	4	442	1
		s69	17c	9		
佐和家（安右衛門） （170石）	土蔵御番など	s21	18c	1950	10	
		s44	18c	4	1717	
佐和家（市郎兵衛、勇之進）学問所奉行など（170石）		s05	19c	1		
			計	8	4123	10
						1

3. まとめ

常三島遺跡機械工学科地点、および、総合科学部3号館地点から出土した貝類の分析を行った。その結果、どちらの地点においてもシジミ属が大半を占める結果となった。以前調査を行った、新蔵遺跡地域・国際交流プラザ地点では、シジミ属はほとんどみられず、ハマグリが多く、サザエも比較的多く確認された（丸山・中原 2015）。常三島遺跡は、中・下級武家屋敷地であるのに対して、新蔵遺跡は上級武家屋敷地であることが関係していると考えられるが、機械工学科地点においてもハマグリが優先する遺構もある。そのため、貝類だけでは、そこまで階級差が反映していない可能性があり、魚類など食生活に関わる他の動物遺存体も含めて検討する必要がある。

註）各調査地点の概報は、徳島大学埋蔵文化財調査室ホームページ（<http://tokudaimaibun.jp/>）で公開されている。参照されたい。

参考文献・資料

奥谷喬司 2006『日本の貝』1・2 学研

丸山真史・中原計 2015「動物遺存体・骨角製品」『新蔵遺跡－地域・国際交流プラザ地点－』第Ⅱ分冊 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

宮本武史編 1972・1973『徳島藩土譜』上・中・下巻 徳島藩土譜刊行会

「御山下島分絵図 常三島」（平井松午・根津寿夫編 2001『徳島城下とその周辺』徳島市立徳島城博物館 所収）